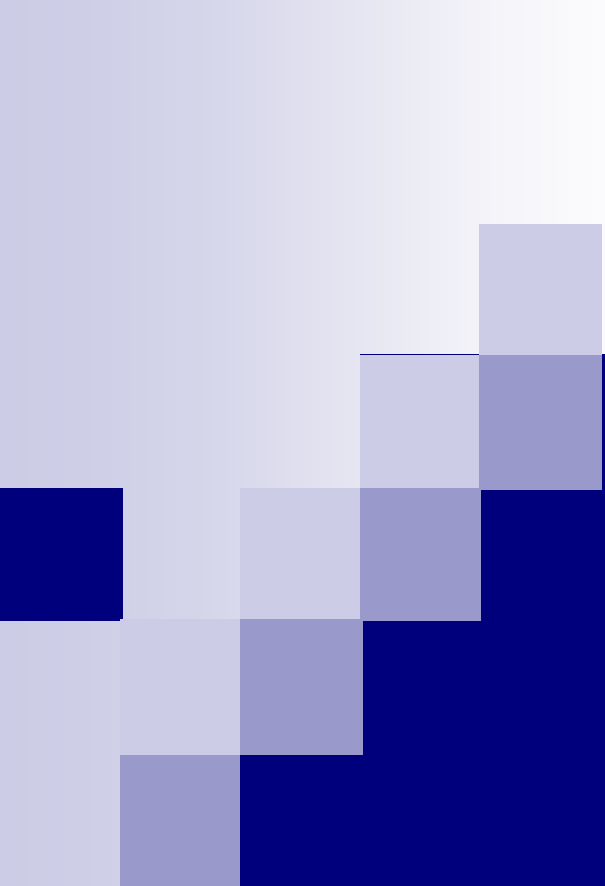




プログラミング演習 I 問3 (第1回)

宇都宮大学工学部情報工学科

概要

- 第1回 単純な整列アルゴリズム(1)
 - C言語の復習(配列, マクロ定義, 代入演算子)
 - バブルソート
- 第2回 単純な整列アルゴリズム(2)
 - C言語の復習(3項演算子)
 - 選択ソートと挿入ソート
- 第3回 高速な整列アルゴリズム
 - CSVファイルの利用
 - クイックソート
 - 課題



整列アルゴリズムとは

整列 (sorting) とは？

		男	女	合計
1	宇都宮市	227,108	226,175	453,283
2	足利市	77,806	81,234	159,040
3	栃木市	40,232	42,030	82,262
4	佐野市	61,766	63,433	125,199
5	鹿沼市	51,525	52,883	104,408
6	日光市	46,840	49,189	96,029
7	小山市	78,348	77,490	155,838
8	真岡市	31,913	31,047	62,960
9	大田原市	37,466	37,756	75,222

整列
(合計)

		男	女	合計
1	宇都宮市	227,108	226,175	453,283
2	足利市	77,806	81,234	159,040
7	小山市	78,348	77,490	155,838
4	佐野市	61,766	63,433	125,199
5	鹿沼市	51,525	52,883	104,408
6	日光市	46,840	49,189	96,029
3	栃木市	40,232	42,030	82,262
9	大田原市	37,466	37,756	75,222
8	真岡市	31,913	31,047	62,960

栃木県住民基本台帳(平成18年3月)より

整列の目的



- 整列自体に目的がある場合
 - 人口統計、成績表、パケット通信など
- 前処理としての整列
 - 整列自体が目的ではなく、別の目的の前処理として整列しておいたほうが良い場合がある。
 - 探索（住所録検索、トランプ、麻雀など）
- 整列は情報処理の基本的なアルゴリズム

整列アルゴリズムの分類

- 内部整列

- 主記憶上で整列

- 外部整列

- 外部記憶上で整列(マージソートが適する)

- 比較による整列

- キーの大小を比較してレコードの交換を行う

- 比較によらない整列

- キーの特別な性質を利用して整列(いつも使えるとは限らない)
 - ビンソート、分布数え上げソート、基数ソート

比較による内部整列の種類

- 単純な整列

- バブルソート、選択ソート、挿入ソート

- やや高速な整列

- シェルソート

- 高速な整列

- クイックソート、ヒープソート

- マージソート



C言語の復習

一次元配列

データ型名 変数名[サイズ];

- `char s[80];`
- `int a[10];`
- `int b[5],c[8];`
- `double d[20];`
- **C言語では配列の添え字は0から始まる**
 - `int a[10];`と宣言した場合, 利用できるのは`a[0]`から`a[9]`まで. `a[10]`は利用できない(コンパイラはチェックしない)

一次元配列の初期化

■ 一次元配列の初期化

```
int a[3];  
a[0] = 3;  
a[1] = 7;  
a[2] = 5;
```

=

```
int a[3] = {3,7,5};
```

≠

```
int a[2] = {3,7,5};
```

=

```
int a[3] = {3,7,5},
```

||

```
int a[] = {3,7,5};
```

最後にカンマ(,)があっても良い

サイズを省略しても良い

■ 文字配列の初期化

```
char s[4] = {'p','e','n','\0'};
```

=

```
char s[4] = "pen";
```

=

```
char s[] = "pen";
```

終端文字 '\0' が入るので、文字列長 +1

≠

```
char s[3] = "pen";
```

サイズを省略しても良い

一次元配列を関数に渡す

```
#include <stdio.h>
/*配列の要素の総和を返す関数*/
int
sum(const int a[ ], int n) {
    int i;
    int s = 0;
    for (i = 0; i < n; i++) {
        s += a[i];
    }
    return s;
}
int
main(int argc, char** argv) {
    int a[5] = {1,2,3,4,5};
    printf("合計 = %d\n",sum(a,5));
    return 0;
}
```

int sum(const int a[5], int n) =
int sum(const int a[],int n)
サイズを指定してもエラーにはならないが意味はない

配列の要素数を関数に教えてやる必要がある
関数側ではどんな長さの配列がくるかわからない

複合代入演算子
s = s + a[i]

•+=	(a+=b; ⇔ a=a+b;)
•-=	(a-=b; ⇔ a=a-b;)
•*=	(a*=b; ⇔ a=a*b;)
•/=	(a/=b; ⇔ a=a/b;)
•%=,&=,^=, =,<<=,>>=	

変数名(サイズなし)と
配列の要素数

文字列を関数に渡す

```
#include <stdio.h>
/*文字列の長さを返す関数*/
size_t
strlen(const char str[]) {
    size_t len = 0;
    size_t i = 0;
    while(str[i++] != '\0'){
        len++;
    }
    return len;
}

int
main(int argc, char** argv) {
    char str[] = "UTSUNOMIYA";
    printf("長さ = %d\n", strlen(str));
    return 0;
}
```

strlen(const char* str)

str[i]が'\0'でない限り

str[]={ 'U','T','S','U','N','O','
'M','I','Y','A','\0' }

```
/*文字列の長さを返す関数(定石記法)*/
size_t
strlen(const char* str) {
    size_t len = 0;
    while(*str++)
        len++;
    return len;
}
```

- C言語のスキルアップのために
- 標準関数を実装してみる(まずはstring.hあたりから)
 - 標準関数が用意されていない処理系もある

練習問題(1)

1. main()関数内でrand()関数を利用(#include <stdlib.h>が必要)して, 0以上100未満の整数の擬似一様乱数をn=10個生成し, それをint配列a[n]に格納する
2. 配列a[]の中身を確認(void print_array(const int a[], int n)を利用)
3. 配列の中身を反転する関数void reverse_int(int a[], int n)を作成せよ
4. 反転した配列a[]の中身を確認(void print_array(const int a[], int n)を利用)

多次元配列

データ型名 変数名[サイズ1][サイズ2]...[サイズn];

- `int a[2][3];`
- `double f[5][8][10];`

多次元配列の初期化

```
int a[2][3];  
a[0][0] = 1;  
a[0][1] = 2;  
a[0][2] = 3;  
a[1][0] = 4;  
a[1][1] = 5;  
a[1][2] = 6;
```

=

```
int a[2][3] = {  
    1,2,3,  
    4,5,6  
};
```

=

```
int a[ ][3] = {  
    1,2,3,  
    4,5,6  
};
```

先頭のサイズは
省略しても良い

```
int a[2][3] = {  
    {1,2,3},  
    {4,5,6},  
};
```

カンマ(,)が
あっても良い

マクロ定義 #define

#define 文字列1 文字列2

- #define SIZE 100
- #define PI 3.14159265358979323846

#define マクロ名(引数) 引数を含む文字列

- #define MUL(a,b) ((a)*(b))
 - $z = \text{MUL}(20,10); \Leftrightarrow z = ((20)*(10));$
 - #define MUL(a,b) a*b
 - $z = \text{MUL}(x+20,y+10); \Leftrightarrow z = x+20*y+10;$
 - #define ADD(a,b) (a)+(b)
 - $z = \text{ADD}(x,y)*10; \Leftrightarrow z=(x)+(y)*10;$

記号定数を用いると
大域的に管理可能

マクロは便利で
効率が良いが、
その利用には
注意が必要

練習問題(2)

1. `#define INT_SWAP(a,b) {int t;t=a;a=b;b=t;}`を利用して配列の練習問題(1)で作成した中身を反転する関数`void reverse_int(int a[], int n)`を改造せよ
2. 配列`a[]`の中身を確認main関数内で定義した文字列`char str[]="UTSUNOMIYA"`を反転(`str[]="AYIMONUSTU"`)する関数`void reverse_char(char* str)`を作成せよ(但し、`string.h`利用不可)

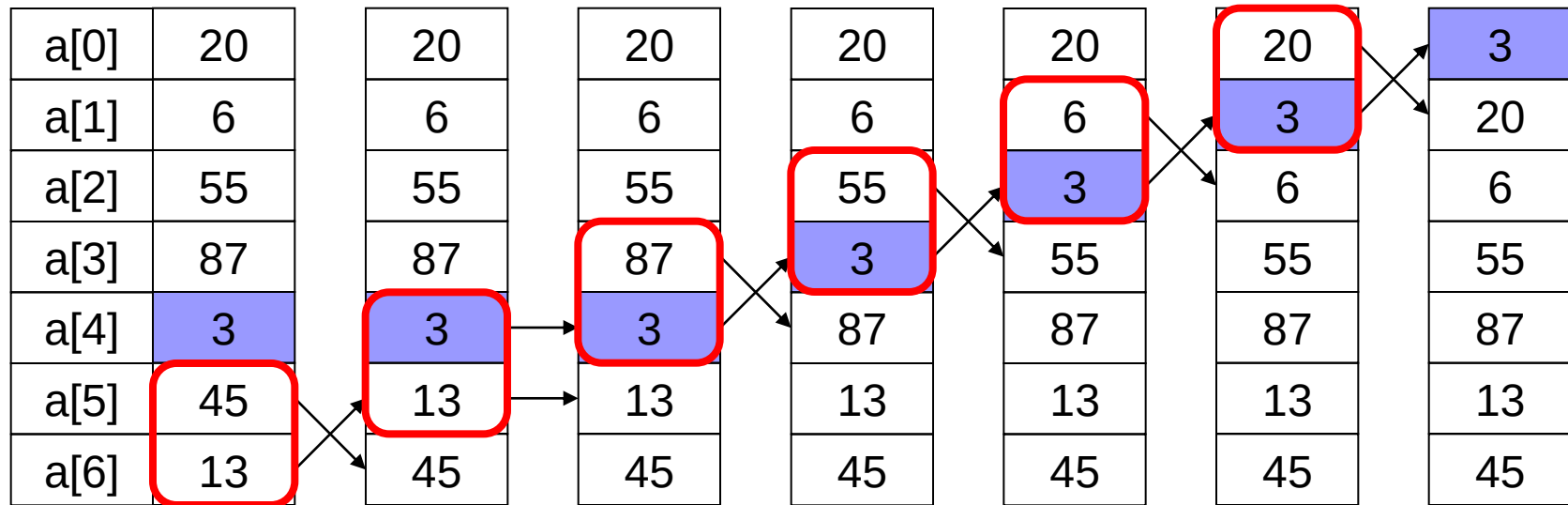
バブルソート

- n 要素int配列 a に適当な整数が入っている
- 配列を昇順(小から大)に整列

バブルソートのアルゴリズム

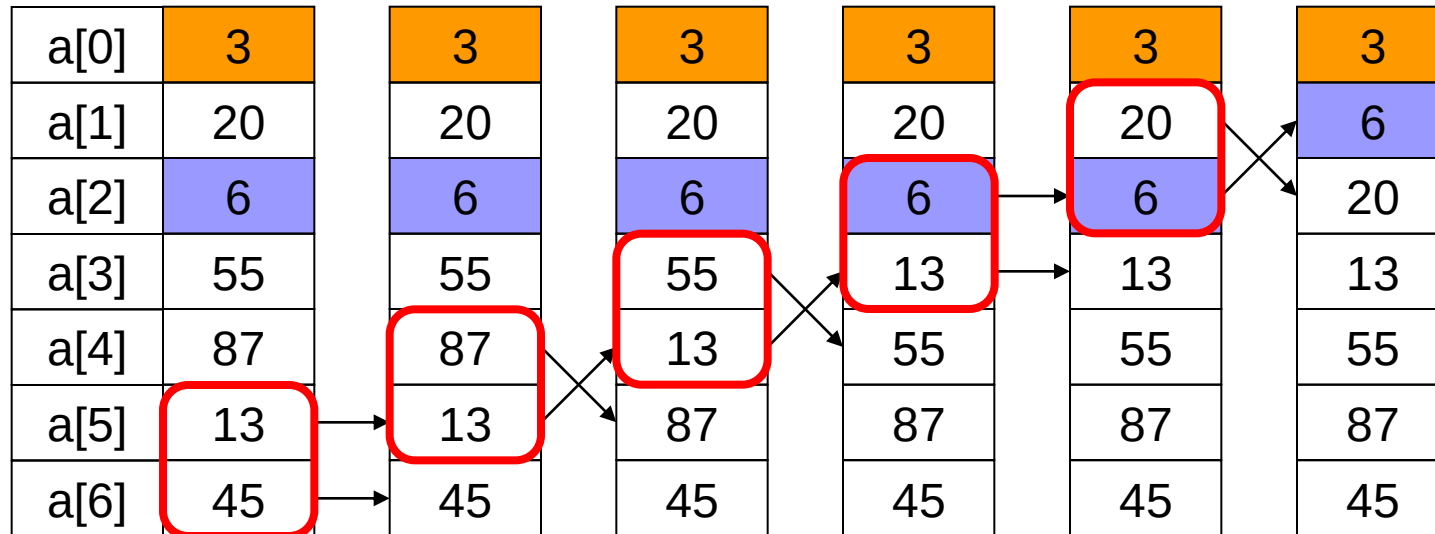
- 配列の後ろから先頭に向かってスキャンしていき、もし隣り合う2つの要素の大小関係が逆であったら、それらを入れ替える

バブルソートの過程(スキャン1回目)



バブルソートの過程(スキャン2回目)

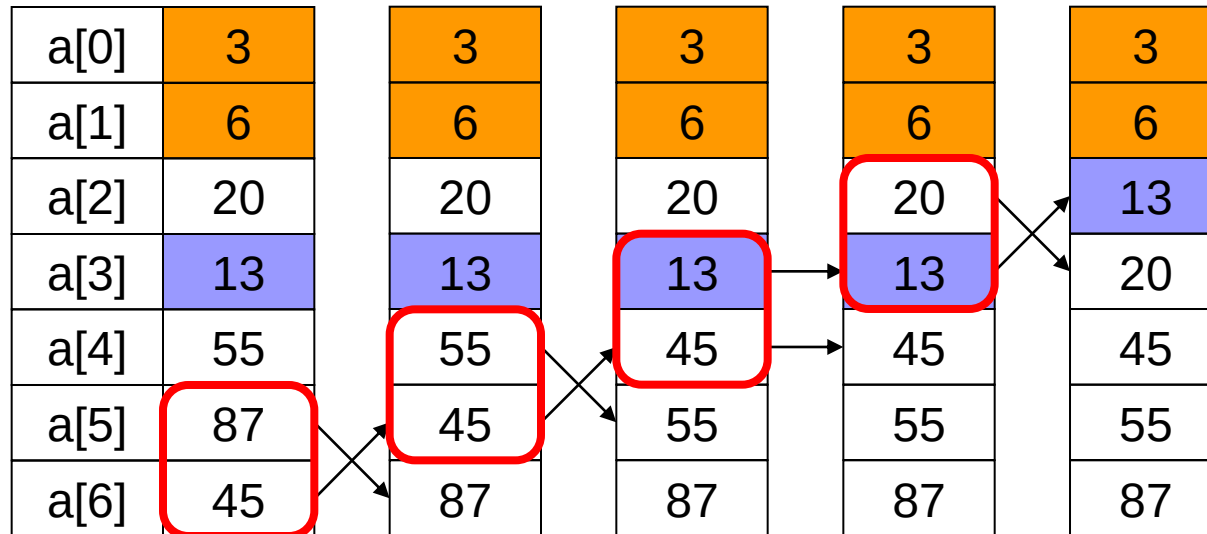
 比較対象外



バブルソートの過程(スキャン3回目)

 比較対象外

a[0]	3	3	3	3	3
a[1]	6	6	6	6	6
a[2]	20	20	20	20	13
a[3]	13	13	13	13	20
a[4]	55	55	45	45	45
a[5]	87	45	55	55	55
a[6]	45	87	87	87	87



バブルソートの過程(スキャン4回目)

 比較対象外

a[0]	3	3	3	3
a[1]	6	6	6	6
a[2]	13	13	13	13
a[3]	20	20	20	20
a[4]	45	45	45	45
a[5]	55	55	55	55
a[6]	87	87	87	87

交換が1度も行われなければ
終了しても良い

バブルソートの過程(スキャン5回目)

 比較対象外

a[0]	3	3	3
a[1]	6	6	6
a[2]	13	13	13
a[3]	20	20	20
a[4]	45	45	45
a[5]	55	55	55
a[6]	87	87	87

Diagram illustrating the 5th scan of Bubble Sort. The array is shown in three states: initial, after comparison, and after swap. Elements 3, 6, 13, 20, and 45 are marked as '比較対象外' (Not comparison target) in orange. Elements 55 and 87 are being compared and swapped, indicated by red boxes and arrows.

バブルソートの過程(スキャン6回目)

 比較対象外

a[0]	3	3
a[1]	6	6
a[2]	13	13
a[3]	20	20
a[4]	45	45
a[5]	55	55
a[6]	87	87

要素数n-1回のスキャンで終了

バブルソートのアルゴリズム

- スキャンが1増えるたびに、比較の回数は1減る.
- あるスキャンにおいて、交換が一回も行われ
ない＝整列されている
 - 各スキャンで交換が1度も行われなければ、以降
のスキャンを行う必要はない.



練習問題(3)

1. main関数内でrand()関数を利用して0～RAND_MAXの擬似乱数をn個生成、配列a[n]に格納
2. 配列a[]をバブルソートによって昇順(小さいものから大きいもの)に並び替える関数void bubble_sort(int a[], int n)を作成

プログラム演習のための参考資料

- `stdio.h`, `stdlib.h`, `time.h`の場所
 - `C:\Program Files\Microsoft Visual Studio 10.0\VC\include`